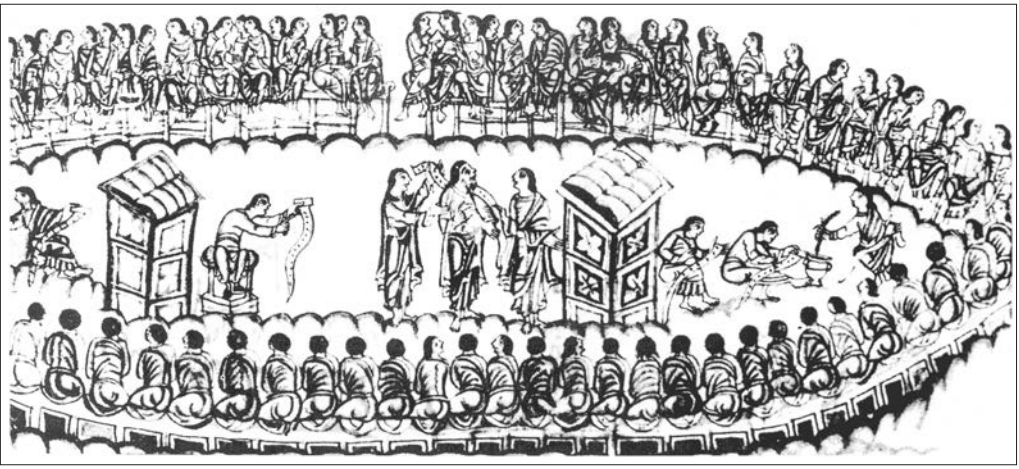
# 日本中世英語英文学会
# 第41回全国大会
## プログラム・発表要旨

時 : 2025年12月13日（土）・12月14日（日）
所 : 明治大学（駿河台キャンパス）

The 41st Congress
The Japan Society for Medieval English Studies
13-14 December 2025
Meiji University (Surugadai Campus)



日本中世英語英文学会

# 目　次



**11月７日（金）[ 必着 ] までに，申し込みフォーム：**
**https://forms.gle/rKKiTW4FTQUSNXJi9（学会 ML 経由推奨），**
**あるいは同封の葉書でご出欠をお知らせください。**

＊今大会におきましては開催期間中，託児業者への委託により，託児所が開設されます。託児所のご利用を希望される方は，大会の出欠フォームにございます**「託児所を利用しますか」の質問にて「はい」を選択し**，以下の情報をご記入のほど，お願いいたします。

**１．お子様の年齢，２．お子様の性別，３．ご利用希望の日付と時間帯**

＊**託児所利用**をご希望の方は，11月３日までご回答ください。
＊**出張証明書**が必要な方は，その旨をご記入ください。


**大会準備委員**

井口　篤（委員長）　新川清治（副委員長）
小河　舜　泉類尚貴　長谷川千春　Jacob Runner　渡辺直子

**開催校委員**

石黒太郎　織田哲司　海田皓介　狩野晃一　下永裕基　髙橋三和子　趙　泰昊

**事務局**

〒214-8571 神奈川県川崎市多摩区東三田1-1-1
明治大学　農学部総合教育科　狩野晃一研究室内
連絡先：jsmes.2025.2026@gmail.com

# 会 長 挨 拶

会員の皆様

会員の皆さま，大会準備委員の先生方，会場校の皆さまをはじめ，関係者のご尽力により，明治大学の素晴らしい会場をお借りして，日本中世英語英文学会第41回大会を開催できますことを，大変うれしく存じます。昨年は40周年記念大会という大きな節目を迎えましたが，本年からは新たな気持ちで，今後の10年を形づくっていきたいと考えております。

コロナ禍を経て，私たちは会議等におけるオンラインの有効活用を学びました。その一方で，対面による全国大会の意義と重みを改めて実感しております。本大会を通じて，会員の皆さまが中世英語英文学について自由に意見を交換し，議論を深めてくださることを願っております。

多くの会員の皆さまと会場でお会いできますことを，心より楽しみにいたしております。

2025年10月吉日

日本中世英語英文学会

会長　**家入　葉子**

# 会 場 案 内

1．受付は，以下の日時・場所で行われます。
**12月13日（土），10:00–16:00，リバティタワー 13階1133教室前**
**12月14日（日），8 :30–10:50，リバティタワー 8 階1083教室前**
受付では，一般会員の年会費徴収は行いません。
2．当日会員会費は，一般1,000円，学生・定年退職者500円です。
3．研究発表およびシンポジウムのハンドアウトにつきましては，後日，学会メーリングリストにてご案内する「指定フォルダ」より各自ダウンロードのうえ，ご持参ください。
なお，会場でも一部ハンドアウトをご用意いたしますが，部数には限りがございます。可能な限り，各自で事前に印刷してご持参いただきますようお願い申し上げます。
4．大会本部は，13階1138教室（12月13日），8 階 1088教室（12月14日）です。
5．会員控室は，13階1131教室（13日）および 8 階1081教室（14日）です。13日・14日ともに 10時頃からご利用いただけます。
6．司会者・発表者控室は，13階1137教室（13日）・ 8 階1089教室（14日）です。
7．書店展示は，14階1144教室（13日）・ 8 階1086教室（14日）にて行われます。
8．ポスターセッションは，13日（土），11:00–12:00に14階1144教室にて，14（日），9 :00–10:00 に 8 階1086教室にて行われます。
9．懇親会は13日（土）の18:00から，**リバティタワー 23階 宮城・岸本ホール**で開催されます。懇親会費（一般 6,000円，学生 3,000円）は当日受付でお支払いください。子供の同伴可（料金は 1,000円，未就学児は無料）です。
10. ご来場の際は公共交通機関の利用を推奨します。車を利用する場合は，リバティタワー地下または周辺の有料駐車場をご利用ください。なお，リバティタワー地下の駐車場料金は10分200円です。
11. キャンパス内は全面禁煙となっています。
12. リバティタワー 17階の食堂は，土曜日は11:30～14:00のみ営業，日曜日は休業しています。なお，大学周辺には多くの飲食店があります。
13. 当学会では宿泊施設の斡旋は行っていません。

## 連 絡 先

明治大学（駿河台キャンパス）
〒101–8301 東京都千代田区神田駿河台1–1
大会本部：リバティタワー 13階1138教室（13日）・8階1088教室（14日）
開催校連絡先 : taro69@meiji.ac.jp

## 会場までのアクセス


（会場は上の図のリバティタワーです。明治大学ウェブサイトより一部転載）

・JR 中央線・総武線／御茶ノ水駅（駅番号：JC03・JB18）下車徒歩約 3 分
・東京メトロ丸ノ内線／御茶ノ水駅（駅番号：M20）下車徒歩約 3 分
・東京メトロ千代田線／新御茶ノ水駅（駅番号：C12）下車徒歩約 5 分
・都営地下鉄三田線・新宿線，東京メトロ半蔵門線／神保町駅
（駅番号：I10・S06・Z07）下車徒歩約 5 分

# 学会会場詳細案内

＊すべてリバティタワー

| | |
|---|---|
| **12月13日（土）** | |
| 開会式・総会・会長講演・シンポジウム | 13階 1133教室 |
| 研究発表 | 13階1134教室，14階1145・1146教室 |
| 会員控室 | 13階 1131教室 |
| 司会者・発表者控室 | 13階 1137教室 |
| 大会本部・大会準備委員控室 | 13階 1138教室 |
| 開催校準備委員控室 | 14階 1141教室 |
| ポスターセッション・書店展示 | 14階 1144教室 |
| 託児所 | 13階 1132教室 |
| 懇親会会場 | 23階 宮城・岸本ホール |
| **12月14日（日）** | |
| 閉会式 | 8階 1083教室 |
| 研究発表 | 7階 1075教室，8階 1084・1087教室 |
| 会員控室 | 8階 1081教室 |
| 司会者・発表者控室 | 8階 1089教室 |
| 大会本部・大会準備委員控室 | 8階 1088教室 |
| 開催校準備委員控室 | 7階 1071教室 |
| ポスターセッション・書店展示 | 8階 1086教室 |
| 託児所 | 8階 1082教室 |

編集委員会（大会前日）：9階 1092教室

# 日本中世英語英文学会　第41回全国大会プログラム

2025年12月13日（土）・12月14日（日）
明治大学（駿河台キャンパス）
〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1
（大会本部：リバティタワー13階1138教室［13日］・８階1088教室［14日］）
開催校連絡先：taro69@meiji.ac.jp

## 第1日　12月13日（土）

**10:00～16:00　受付**（リバティタワー13階1133教室前）
＊会員控室（リバティタワー13階1131教室）

**11:00～12:00　ポスターセッションⅠ**（リバティタワー14階1144教室）

**12:00～12:30　開会式・総会**（リバティタワー13階1133教室）
司会　狩野晃一（明治大学）
開会の言葉　会長　家入葉子（京都大学）
議事
事務局報告　事務局長　狩野晃一（明治大学）
編集委員会報告　編集委員長　張替涼子（東京理科大学）
大会準備委員会報告　大会準備委員長　井口　篤（慶應義塾大学）
大会案内　開催校委員　石黒太郎（明治大学）

**12:45～13:45　会長講演**（リバティタワー13階1133教室）
非断定形 *any*（non-assertive *any*）の展開―中英語後期の印刷本コーパスに基づく分析
家入葉子（京都大学）

**14:00～15:30　研究発表Ⅰ**（リバティタワー13階1134教室）

**14:00～14:40　司会**　寺澤　盾（青山学院大学）
１．Variation 再考―*Beowulf* におけるその定義と役割について
木内祥太（慶應義塾大学大学院）

**14:50〜15:30　司会**　小竹　直（東京外国語大学）

2．Aldred の選定，*uirgo* の行間注 *hehstald*

田本健一（愛知大学名誉教授）

**14:00〜15:30　研究発表Ⅱ**（リバティタワー14階1145教室）

**14:00〜14:40　司会**　海田皓介（明治大学）

3．古英詩における *to*-infinitive の用法

小倉美知子（明治大学客員研究員）

**14:50〜15:30　司会**　佐藤桐子（大東文化大学）

4．中英語聖書における不定詞の選択過程

佐藤信正（独立研究者）

**14:00〜15:30　研究発表Ⅲ**（リバティタワー14階1146教室）

**14:00〜14:40　司会**　大野英志（広島大学）

5．「quod he」は詩行の一部なのか？―ラングランドと『ガウェイン』詩人におけるリズムの創造性

井上典子（関西大学）

**14:50〜15:30　司会**　趙　泰昊（明治大学）

6．*Kyng Alisaunder* のヘッドピースと音楽

松沢絵里（大阪芸術大学）

**15:40〜17:40　シンポジウム**（リバティタワー13階1133教室）

Approaches to Old English Textual Criticism

司会　唐澤一友（立教大学）

1．Wulfstan's Stylistic Intentions in his Homilies: A Reassessment through Manuscript Evidence

小河　舜（上智大学）

2．Hapax or Not: *æradl* in *Maxims I* 31b

唐澤一友（立教大学）

3．A Note on *Beowulf* 748b-49a

寺澤　盾（青山学院大学）

4．Metre and the Editing of Old English Verse Texts

Rafael J. Pascual（Universidad de Granada）

**18:00〜20:00　懇親会**（リバティタワー23階 宮城・岸本ホール）

# 第2日　12月14日（日）

**8:30～10:50　受付**（リバティタワー8階1083教室前）
＊会員控室（リバティタワー8階1081教室）

**9:00～10:00　ポスターセッションⅡ**（リバティタワー8階1086教室）

**10:00～12:20　研究発表Ⅳ**（リバティタワー7階1075教室）

**10:00～10:40　司会**　伊藤　尽（信州大学）

7．The Sea Gives and Takes: Islands Made and Unmade by the North Sea

Britton Elliott Brooks（九州大学）

**10:50～11:30　司会**　守屋靖代（国際基督教大学名誉教授）

8．教養としての古英語教育の新たなアプローチ

三浦あゆみ（東京大学）

**11:40～12:20　司会**　岡本広毅（立命館大学）

9．グウィネヴィア，アルトリウス，聖杯，円卓―フロム・ソフトウェアのゲームに見る中世主義

小宮真樹子（近畿大学）

**10:00～12:20　研究発表Ⅴ**（リバティタワー8階1084教室）

**10:00～10:40　司会**　工藤義信（石川県立看護大学）

10. *The Canterbury Tales* における職業巡礼者としての Wife of Bath

立花香里（同志社大学大学院）

**10:50～11:30　司会**　菅野磨美（金沢大学）

11. John Mirk の語りの戦略―*Festial* における St Winifred の懲罰的奇跡の活用

中川健司（慶應義塾大学大学院）

**11:40～12:20　司会**　松田隆美（慶應義塾大学名誉教授）

12. John Gower のモラル・バラード―海峡横断的視点からの一考察

小林宜子（東京大学）

**10:00～12:20　研究発表Ⅵ**（リバティタワー8階1087教室）

**10:00–10:40　司会**　市川　誠（東京理科大学）

13. Ælfric の説教と聖人伝における *soplice* と *witodlice* の用法について
佐藤桐子（大東文化大学）

10:50–11:30　**司会**　小塚良孝（愛知教育大学）

14.『アングロ・サクソン年代記』A，B，C 写本の Common Stock における関係代名詞の用法
阿部春来（早稲田大学学部生）

11:40–12:20　**司会**　谷　明信（関西学院大学）

15. Legal Multinomials in Late Middle English
Johanna Vogelsanger（University of Zurich）

12:20–12:30　**閉会式**（リバティタワー8階1083教室）

閉会の言葉
副会長　鎌田幸雄（仙台大学）

# PROGRAMME

## SATURDAY 13 DECEMBER

**10:00～16:00 Registration** (Liberty Tower, 13th floor, Room No. 1133)
*Members' Waiting Room (Liberty Tower, 13th floor, Room No. 1131)

**11:00～12:00 Poster Session I** (Liberty Tower, 14th floor, Room No. 1144)

**12:00～12:30 Plenary Session** (Liberty Tower, 13th floor, Room No. 1133)
Moderator: KANO, Koichi, Meiji University
Opening Address — IYEIRI, Yoko, President of JSMES, Kyoto University
Business Announcements

**12:45～13:45 Inaugural Lecture** (Liberty Tower, 13th floor, Room No. 1133)
The Development of Non-Assertive *any*: A Corpus-Based Analysis of Late Middle English Printed Texts
IYEIRI, Yoko, Kyoto University

**14:00～15:30 Paper Session I** (Liberty Tower, 13th floor, Room No. 1134)

14:00～14:40 Moderator: TERASAWA, Jun, Aoyama Gakuin University
1. Variation Reconsidered: Its Definition and Functions in *Beowulf*
KIUCHI, Shota, Graduate School, Keio University
14:50～15:30 Moderator: KOTAKE, Tadashi, Tokyo University of Foreign Studies
2. Aldred's Choice of *hehstald* as an Interlinear Gloss of *uirgo*
TAMOTO, Kenichi, Professor Emeritus, Aichi University

**14:00～15:30 Paper Session II** (Liberty Tower, 14th floor, Room No. 1145)

14:00～14:40 Moderator: KAITA, Kosuke, Meiji University
3. On the Use of the *to*-Infinitive in Old English Poems
OGURA, Michiko, Research Fellow, Meiji University

14:50～15:30　Moderator: SATO, Kiriko, Daito Bunka University

4．The Selection Process of Infinitives in Middle English Bible Translations

SATO, Nobumasa, Independent Researcher

**14:00～15:30　Paper Session III** (Liberty Tower, 14th floor, Room No. 1146)

14:00～14:40　Moderator: OHNO, Hideshi, Hiroshima University

5．Is *quod he* Part of the Line? Rhythmic Creativity in Langland and the *Gawain* Poet

INOUE, Noriko, Kansai University

14:50～15:30　Moderator: JO, Taeho, Meiji University

6．Headpiece and Music in *Kyng Alisaunder*

MATSUZAWA, Eri, Osaka University of Arts

**15:40～17:40　Symposium** (Liberty Tower, 13th floor, Room No. 1133)

Approaches to Old English Textual Criticism

KARASAWA, Kazutomo, Rikkyo University

1．Wulfstan's Stylistic Intentions in His Homilies: A Reassessment through Manuscript Evidence

OGAWA, Shun, Sophia University

2．Hapax or Not: *æradl* in *Maxims I* 31b

KARASAWA, Kazutomo, Rikkyo University

3．A Note on *Beowulf* 748b-49a

TERASAWA, Jun, Aoyama Gakuin University

4．Metre and the Editing of Old English Verse Texts

PASCUAL, Rafael J., Universidad de Granada

**18:00～20:00　Reception** (Liberty Tower, 23rd floor, Miyagi & Kishimoto Halls)

## SUNDAY 14 DECEMBER

**8:30～10:50 Registration** (Liberty Tower, 8th floor, Room No. 1083)
*Members' Waiting Room (Liberty Tower, 8th floor, Room No. 1081)

**9:00～10:00 Poster Session II** (Liberty Tower, 8th floor, Room No. 1086)

**10:00～12:20 Paper Session IV** (Liberty Tower, 7th floor, Room No. 1075)

10:00～10:40 Moderator: ITO, Tsukusu, Shinshu University

7. The Sea Gives and Takes: Islands Made and Unmade by the North Sea
BROOKS, Britton Elliott, Kyushu University

10:50～11:30 Moderator: MORIYA, Yasuyo, Professor Emerita, International Christian University

8. A New Approach to Teaching Old English as a Liberal Arts Subject
MIURA, Ayumi, The University of Tokyo

11:40～12:20 Moderator: OKAMOTO, Hiroki, Ritsumeikan University

9. Gwynevere, Artorias, Holy Chalices and the Roundtable Holds: Medievalism in FromSoftware Games
KOMIYA, Makiko, Kindai University

**10:00～12:20 Paper Session V** (Liberty Tower, 8th floor, Room No. 1084)

10:00～10:40 Moderator: KUDO, Yoshinobu, Ishikawa Prefectural Nursing University

10. The Palmer Wife of Bath in *The Canterbury Tales*
TACHIBANA, Kaori, Graduate School, Doshisha University

10:50～11:30 Moderator: KANNO, Mami, Kanazawa University

11. John Mirk's Narrative Strategy: The Functions of St Winifred's Punitive Miracles in the *Festial*
NAKAGAWA, Takeshi, Graduate School, Keio University

11:40～12:20 Moderator: MATSUDA, Takami, Professor Emeritus, Keio University

12. John Gower's Moral Ballades: A Consideration of His Participation in a Cross-Channel Literary Community
KOBAYASHI, Yoshiko, The University of Tokyo

**10:00～12:20 Paper Session VI** (Liberty Tower, 8th floor, Room No. 1087)

10:00～10:40 Moderator: ICHIKAWA, Makoto, Tokyo University of Science

13. Ælfric's Use of *soplice* and *witodlice* in Homily and Hagiography
SATO, Kiriko, Daito Bunka University

10:50～11:30 Moderator: KOZUKA, Yoshitaka, Aichi University of Education

14. Relative Pronouns in the Common Stock Part of the *Anglo-Saxon Chronicle* as Represented in MSS A, B and C
ABE, Haruki, Undergraduate Student, Waseda University

11:40～12:20 Moderator: TANI, Akinobu, Kwansei Gakuin University

15. Legal Multinomials in Late Middle English
VOGELSANGER, Johanna, University of Zurich

**12:20～12:30 Closing Address** (Liberty Tower, 8th floor, Room No. 1083)
KAMATA, Yukio, Vice-President of JSMES, Sendai University

# 発表要旨

## 第1日　12月13日（土）

**14:00～15:30　研究発表Ⅰ**（リバティタワー 13階1134教室）

**14:00～14:40　司会**　寺澤　盾（青山学院大学）

### 1．Variation 再考― *Beowulf* におけるその定義と役割について

木内祥太（慶應義塾大学大学院）

variation は古英詩によく見られる詩的技法である。これまで多くの学者がそれについて研究してきた。variation に関する研究が本格的に始まったのは，Paetzel（1913）以降である。Paetzel はその特徴を明らかにすることに努めていた。その後，*Beowulf* と *Iliad* を比較し，variation の経済性に関する研究（Whallon 1965; Fry 1968）や，*The Battle of Brunanburh* における使用例に関する研究（Bolton 1968），詩の年代測定に利用した研究（Mcturk 1997）が存在する。中でも，Brodeur（1959）と Robinson（1985）はこの分野における代表的なものである。両者は，*Beowulf* を対象に variation の役割について詳細な議論をしてきた。

これまでの研究は，variation の役割を中心に分析を行ってきた。しかし，基本的かつ重要な問題が未解決である。それは定義の問題だ。Brodeur や Robinson に加えて, O'Keeffe（1997）も variation の定義を試みている。しかし，Greenfield（1972）がすでに指摘しているように，それらに同意は得られていない。その最大の理由は，類似する他の詩的技法との区別がなされていないことにある。

本発表では，*Beowulf* を対象に variation を再定義し，その役割を考察する。variation 研究を困難にさせている要因の１つに，使用されている語の種類が多彩で，あらゆる語が variation の構成要素になりえることが挙げられる。Harris（1982）が動詞に限定して variation の新たな特徴を明らかにしたように，本発表でも対象語彙を限定する必要がある。ここでは分析対象を類義語に限定することで定義の問題を解決し，特定語彙における variation の特徴を明らかにする。そして，それにより他の詩的技法の定義の必要性を示していく。

**14:50～15:30　司会**　小竹　直（東京外国語大学）

## ２．Aldred の選定，*uirgo* の行間注 *hehstald*

田本健一（愛知大学名誉教授）

古期英語 *hagosteald* は本来 “haw, 小さな囲い地の所有者” の意味であった。その語は地名の構成要素にもなった。Hexham である。*hagostaldes éa* と綴られていた。そういう *hagosteald* という人々の生活は長兄に依存していた。*Hagosteald* とその異綴り形には，“（若い）戦士”，“独身の男”，“青年” といった語義が派生した。

特に，行間注で重要なのは，二つの異形，*heghstald* と *hehstald* である。前者は２例のみであるが，後者は39例みられる。これら41例は Aldred が行間注を付した二編の文献にのみ現れる。*Codex Lindisfarnensis* と *Rituale Ecclesiæ Dunelmensis* である。Aldred は *he(g)hstald* を *uirgo* の注釈用語として選定したのであるが，綴り字上，音韻論上，そして語義変遷上，これらの異形は他に類を見ない程特異な展開を成したのである。男性，女性の別なく *he(g)hstald* を *uirgo* の訳語としたのである。本来乙女であった *παρθένος*，そして *uirgo* で男性の virgin に言及することは，「ヨハネの黙示録」（14–4）に見られる。それらの訳語として男女ともに *he(g)hstald* が選定されたのである。virgin の概念とその文献学的背景を考察する。

**14:00～15:30　研究発表Ⅱ**（リバティタワー 14階1145教室）

**14:00～14:40　司会**　海田皓介（明治大学）

## ３．古英詩における *to*-infinitive の用法

小倉美知子（明治大学客員研究員）

古英語期の *to*-infinitive ないし inflected infinitive の用法に関しては，Callaway（1913）をはじめ Los（2005）まで，多くの研究者がその用法について説明してきたが，詩における用法についての説明は限られている。本発表では，詩行だからこそ見られる特徴を分類し，典型的な例，散文的に書かれた場合との比較，bare infinitive との交替，文脈による解釈の違い等について議論する。特に *to*-infinitive は *beon/wessan* と共に用いられることがよく見られたため，passive meaning で解釈されることが多かったが，infinitive は voice に関係しないため，その解釈が現代英語に影響されたものであることを指摘する。

**14:50〜15:30　司会**　佐藤桐子（大東文化大学）

## ４．中英語聖書における不定詞の選択過程

**佐藤信正**（独立研究者）

本研究では，中世語聖書における不定詞選択の文法意識を三方向から分析した。第一に，ラテン語不定法から前期中英語聖書への翻訳過程を分類し，不定法に関する10種の翻訳パターンが全体の87.2%を占めることを示した。第二に，前期中英語聖書の不定詞に対応するラテン語文法要素を分析し，94%が直訳的対応である一方，残りの６％に中英語話者特有の文法意識の反映があることを明らかにした。特にこの部分に含まれるラテン語未来分詞はすべて to 不定詞に対応させられていた。第三に，前期版と後期版の比較から，目的表現では有限節から非定形節への簡潔化が進む一方，対格不定詞構文では逆に非定形から有限節への移行も見られた。事例研究として，『ルカによる福音書』24:28の多義性解消としての従属節化や，24:37の対格不定詞構文対応の変遷を検証した。また，for-to 不定詞については，特定の文法形式ではなく翻訳者や写本編集者の文体的選択を反映している可能性を明らかにした。

**14:00〜15:30　研究発表Ⅲ**（リバティタワー 14階1146教室）

**14:00〜14:40　司会**　大野英志（広島大学）

## ５．「quod he」は詩行の一部なのか？
## ―ラングランドと『ガウェイン』詩人におけるリズムの創造性

**井上典子**（関西大学）

中英語頭韻詩は，長らくリズムが自由で不規則とされてきたが，1990年前後に Thomas Cable と Hoyt N. Duggan が後半行（b-verse）の規則性を体系化したことで，韻律研究は飛躍的に進展した。現在では，チョーサーと同様，頭韻詩にも高度な韻律意識があったとされている。本発表では，14 世紀を代表する二人の詩人―ラングランドと『ガウェイン』詩人―を取り上げ，とくに前半行（a-verse）に現れるスピーチタグ（*quod he*，*quoþ Gawayn* など）に注目する。ラングランドの作品では，これらがしばしば「行外要素（extrametrical）」として四拍構造（four-beat structure）を乱さずに挿入されている。

さらに後半では，『ガウェイン』詩人の少数の「例外的な」前半行に焦点を当てる。これらは，スピーチタグを含む前半行における典型的なリズムパタンから逸脱しており，以前の自身の研究（Inoue 2018）では異なる解釈を示して

いた。ラングランドとの比較を通じてこれらの詩行を再検討し，より自然で文脈に即した読解を提示したい。頭韻詩における柔軟性と規則性の共存，そして韻律・リズムと詩の意味との有機的連関に光を当てたい。

**14:50〜15:30　司会**　趙　泰昊（明治大学）

## 6．*Kyng Alisaunder* のヘッドピースと音楽

**松沢絵里**（大阪芸術大学）

14世紀初期のロマンス *Kyng Alisaunder*（KA）は8021行のアレクサンダー大王の叙事詩で二行連句を基本とする。校訂者スミザーズは中世ロマンスの最高作品の一つとして KA を位置付け，その根拠の一つが，物語の転換部に数行挿入されているヘッドピース（HP）とする。そこではイングランドの四季の美しさ，生活の楽しさや教訓などが歌われている。まず，KA で使われた楽器等の音楽関係の語彙，場面を説明する。次に，内容の点から，14世紀のフランスの詩と関係を検証する。韻律の面で，KAHP で特徴的な点は，同一脚韻が多いことである。同一脚韻は戦闘場面でも現れるが，戦闘場面では次々と変わる場面を一定のリズムで伝え，HP では，数行にまとまりを与えることができる。これは，14世紀までのフランス世俗歌でも観察される。また，韻律に関し HP の部分と地の文の違いも検証する。このような構成と世界観の中で，14世紀初期における KA の位置づけを，音楽と物語の観点から検証する。

**15:40〜17:40　シンポジウム**（リバティタワー 13階1133教室）

## Approaches to Old English Textual Criticism

**司会**　KARASAWA, Kazutomo（Rikkyo University）

Old English philological studies represent efforts to better understand the Old English language and literature, and form one of the essential foundations of Old English textual criticism. They cover multiple fields of study such as phonology, morphology, syntax, lexicology, and metrics, and progress made in any of these and other relevant fields could contribute to bringing about a new, better, or more convincing understanding of a text. Since there is no end to the studies in these fields, Old English textual criticism, or the quest for a more accurate, deeper understanding of texts written in the vernacular in the Anglo-Saxon period, is also endless. In fact, great efforts of past and present scholars notwithstanding, we often encounter textual and interpreta-

tional problems unsolved or worth reconsidering. This symposium explores four approaches to text-critical and interpretational problems, and discusses various possibilities of philological studies in addressing text-critical issues. In the course of discussion, utility of metrics is emphasised in criticising poetic texts, while (un)reliability of manuscript texts is also reviewed. This symposium is intended as part of a larger, international project focussing on Old English and Old Norse metrical and text-critical issues led by one of the panellists.

## 1. Wulfstan's Stylistic Intentions in his Homilies: A Reassessment through Manuscript Evidence

OGAWA, Shun (Sophia University)

This paper examines the style and rhythm of the homilies by Wulfstan, Archbishop of York (d. 1023), with a particular focus on manuscript punctuation. Although the distinctive nature of Wulfstan's prose style has long been acknowledged by many Wulfstanian scholars, previous studies on his style and rhythm—characterised by the "two stress phrases"—have primarily centred on the syntactic aspect, and the relation between his style and manuscript punctuation has not yet been fully explored. Because London, British Library, Cotton Nero A. i preserves Wulfstan's handwriting in his homiletic works, it has received the greatest scholarly attention, but there are several other manuscripts that contain both his own hand and homilies (e.g., Copenhagen, Kongelige Bibliotek, G.K.S. 1595(4°), and the so-called York Gospels). By comparing punctuation in multiple manuscripts in relation to syntactic features, this paper offers a better understanding of Wulfstan's stylistic intentions and reveals chronological developments in his style across homilies composed at different stages of his career. The analysis offered in this paper will also serve as an impetus to reassess the renderings in previous editions of Wulfstan's works.

## 2. Hapax or Not: *æradl* in *Maxims I* 31b

KARASAWA, Kazutomo (Rikkyo University)

Line 31b of the Old English gnomic poem *Maxims I* reads *þa ær adl nimeð* in the manuscript. Early editors such as Thorpe, Grein, Wülker, and Williams follow the manuscript reading in their editions, whereas in all later editions (except in the most recent one by myself), the half-line is printed as *þa æradl nimeð* here, with *ær* and *adl* being regarded as forming a nonce compound meaning 'disease at an early age'. This reading is firmly established now, having been undisputed for more than a century. In fact, all major Old English dictionaries, namely, those edited by Sweet, Bosworth and Toller, and Clark Hall, as well as the most recent *Dictionary of Old English*: *A-Le*, recognise the compound. It is true that the reading makes sense in the context, while it is not uncommon for Anglo-Saxon scribes to separate compound elements as if they are two words. However, there are some good reasons to suppose that the manuscript *ær adl* are intended (by the poet) as two words rather than a compound. Taking this half-line as an example and pointing out the problems of its current reading, I shall explore multiple aspects of textual criticism that editors must take into account when they edit Old English poetic texts.

## 3. A Note on *Beowulf* 748b-49a

TERASAWA, Jun (Aoyama Gakuin University)

In the passage that depicts the conflict between Beowulf and Grendel, the hero's determination to fight with the monster is described in terms of the adverbial *inwitþancum*, as in *he onfeng hraþe / inwitþancum* (748b-49a). The sentence would be rendered as 'he [Beowulf] quickly seized (Grendel) with malicious thoughts' with the object of *onfeng* understood. As it is generally understood to imply 'malice or deceit', however, *inwit-* appears ill-suited to describe Beowulf, with the interpretation of the sentence in question having been the subject of much debate. Many editors and translators of the epic have sought to provide the compound *inwitþancum* with neutral or positive interpretations that diverge to some extent from its original meaning, such as 'with hostile intent' (Klaeber 1950; Jack 1994; Mitchell and Robinson 2006;

Fulk et al. 2008), 'with a belligerent aim' (Fulk 2010), and 'with astute presence of mind' (Bradley 1982). While taking the meaning of the compound as it is, others avoid the negative image of Beowulf: Wrenn (1953, 1958), for instance, construes *onfeng* as a verb of perception taking a dative object and associates *inwitþancum* with Grendel: 'Quickly did he [Beowulf] perceive that plan of malice'. In the third *and* subsequent editions by Wrenn-Bolton (1973, 1988, 1996), *inwitþancum* is taken as an adjective referring to Grendel: 'he quickly lay hold of the one evil in thought [dat. obj. of onfēng]'. In this paper, I shall revisit one of the Beowulfian cruxes mentioned above and attempt to present a new alternative reading with reference to the dual perspectives of the *Beowulf* poet.

## 4. Metre and the Editing of Old English Verse Texts

Rafael J. PASCUAL (Universidad de Granada)

In the past few decades, the editing of Old English poetry has been dominated by a conservative attitude towards the surviving manuscript texts. Editors have refrained from emending abnormal readings *metri causa* on the grounds that our knowledge of the Anglo-Saxons' system of vernacular versification is insufficient, and so it has often been deemed unreliable. Recent advances in the field of Old English metrical theory, however, suggest that such a lack of trust in the ability of metre to establish better readings is unfounded. In this paper, I will make a case for the reliability of metrics as an effective tool for the editing and textual criticism of Old English verse, illustrating my arguments with several new emendation proposals to readings mainly from verse texts other than *Beowulf* (on which discussions of Old English textual criticism have tended to focus).

# 第2日　12月14日（日）

**10:00～12:20　研究発表Ⅳ**（リバティタワー 7階1075教室）

**10:00～10:40　司会**　ITO, Tsukusu（Shinshu University）

## 7．The Sea Gives and Takes: Islands Made and Unmade by the North Sea

Britton Elliott BROOKS（Kyushu University）

This paper will examine the interrelationship between peoples along the North Sea cost and their aqueous environment, particularly in terms of land being given by, taken by, or reclaimed from the sea. Due to the length of the North Sea coast, this paper will focus on two primary locations as case studies with wider relevance: the Isle of Thanet in Kent, and Ravenser Odd in the Humber River. By utilising a deliberately inter- and trans-disciplinary approach, this research will shed light on the ways in which the non-human elemental world overlapped, enmeshed, transformed, and was transformed by the peoples living near the North Sea coast. Principally, it will employ elements from the environmental humanities, including GIS mapping technology, literary, linguistic, and historical analysis, as well as elements of historical embodied epistemology and new materialism. It will examine a variety of texts in both Old English and Anglo-Latin, including Bede's *Historia Ecclesiastica Gentis Anglorum*, the Old English translation of Bede's *Historia*, the *Anglo-Saxon Chronicle*, Asser's *Vita Alfredi regis*, Goscelin's *Vita St Mildrithae*, Thomas Burton's *Chronica Monasterii de Melsa*, as well as several Patent Rolls and Anglo-Saxon Charters. The paper will argue that the dynamic nature of living on the North Sea coast demanded constant changes in identity, culture, and ultimately shaped the people who lived there.

**10:50–11:30　司会**　守屋靖代（国際基督教大学名誉教授）

## 8．教養としての古英語教育の新たなアプローチ

**三浦あゆみ**（東京大学）

本発表では，応募者が今年度前半に2 つの大学で新たに展開した古英語入門の授業の成果を検証することで，主に国内における今後の古英語教育の一つの可能性を提示する。2大学のいずれも授業の開講母体は大学院で，学部生も履修できたが，「英語英文学科」の類いではなく，履修者の経歴や学問的関心は多様なことが予想された。このように研究者養成を必ずしも目的とせず，教養として古英語を学ぶためにはどのようなアプローチがふさわしいだろうか。

この問いについて考えるため，まず応募者自身が学生時代に受けた古英語の教育を振り返り，続いて現在国内外にある初学者向けの古英語教育のリソースや国内の大学における古英語の授業について取り上げる。応募者は諸要素を踏まえた上で Gorrie（2024）を上記の2大学ともに採用し，オーソドックスではない教育方法を導入したが，履修者からのフィードバックを踏まえつつその功罪について検討する。

**11:40～12:20　司会**　岡本広毅（立命館大学）

## 9．グウィネヴィア，アルトリウス，聖杯，円卓―フロム・ソフトウェアのゲームに見る中世主義

**小宮真樹子**（近畿大学）

フロム・ソフトウェアのゲームは，アーサー王伝説のモチーフを用いている。『ダークソウル』シリーズ（2011-17）には「グウィネヴィア」や「アルトリウス」が，『ブラッドボーン』（2015）には「聖杯」が，『エルデンリング』（2022）『エルデンリング　ナイトレイン』（2025）には「円卓」が登場する。

だが，これらは中世文学に直接触発されたものではない。開発者の宮崎秀高氏は，英国のゲームブック「ファイティング・ファンタジー」（1982）からの影響だと語る。Patrick Butler による『ダークソウル』と中世文学に関する研究（2023）はその点を踏まえておらず，より的確な分析が求められる。

そこで本発表は，フロムの作品がどのようにゲームブックを経由し，アーサー王伝説を用いているかを精査する。ゲームにおける中世描写の具体例を通じ，研究と娯楽の相違点と，それぞれの意義・役割を論じることが目的である。

**10:00～12:20　研究発表Ⅴ**（リバティタワー 8階1084教室）

**10:00～10:40　司会**　工藤義信（石川県立看護大学）

## 10. *The Canterbury Tales* における職業巡礼者としての Wife of Bath

**立花香里**（同志社大学大学院）

*The Canterbury Tales* における Wife of Bath は，様々な巡礼地を旅する人物として描かれている。先行研究内では，Wife of Bath の服装描写が職業巡礼者を連想させると同時に，その姿は彼女の結婚話に合わないという指摘も多い。一方で，Wife of Bath が語る内容の本質は，必ずしも結婚の概念にあるとは言い切れない。というのも，彼女は自身の結婚話を麦に例え，その麦から種を取るように示唆しているからである。この麦を始めとした穀物の比喩表現は，表面を覆う殻が人々に馴染みやすい主題を指し，種が聖書釈義批評に基づく宗教的な内容を表すと考えられていた。したがって，Wife of Bath の語りにおいて，結婚話は読者にとって身近な生活体験として取り入れられたものであり，その核心部分には，彼女が巡礼地へ赴く姿に示唆される巡礼に関する要素を含むと解釈出来る。

以上の内容を踏まえて，本発表では，Wife of Bath が語る結婚観に加え，巡礼という視点から前口上と物語を考察することで，職業巡礼者としての Wife of Bath の姿を明らかにしたい。

**10:50～11:30　司会**　菅野磨美（金沢大学）

## 11. John Mirk の語りの戦略―*Festial* における St Winifred の懲罰的奇跡の活用

**中川健司**（慶應義塾大学大学院）

14–15世紀のアウグスチノ会士 John Mirk の中英語説教集 *Festial* における聖女 Winifred の懲罰的奇跡の教化的機能を考察する。*Festial* は教区司祭のために著された実用的な説教の手引書であり，説教本文に加えて narracio と呼ばれる挿話を通じて聴衆の生活に教訓を根づかせる構成が特徴的である。Winifred は自身の祝日説教のみならず，四旬節第三主日の narracio でも登場し，告解を怠ったために再び病に苦しむ男の逸話を通じて，告解と司祭の権威の重要性が説かれる。

ここにおいて，Winifred の懲罰的奇跡の語りは，聖人の怒りに仮託する形で教会権力の役割を強調する戦略的装置として用いられている。Mirk 以前の

ラテン語・中英語による St Winifred 伝中の懲罰的奇跡が，聖泉や聖人に対する不敬への直接的罰として描かれるのに対し，Mirk の語りは懲罰の主体を Winifred に置きつつも，その目的を信仰実践の教育に据えている点に独自性が認められる。本発表では，懲罰的奇跡という語りの型が，地域的信仰の枠組みにおいて，いかに制度的秩序の教育的道具として利用されたのかを明らかにする。

**11:40〜12:20**　司会　松田隆美（慶應義塾大学名誉教授）

## 12. John Gower のモラル・バラード—海峡横断的視点からの一考察

**小林宜子**（東京大学）

本発表は，ジョン・ガワーのフランス語によるバラード連作 *Traitié pour essampler les amantz marietz*（『結婚論』）の分析と解釈を中核に据え，ナショナルな枠組では把捉しがたい本作品の意義を海峡横断的な枠組の中で捉え直すことを目的とする。具体的には，フランスの詩人ユスターシュ・デシャンが著した詩論（*L'Art de dictier*）に照らして『結婚論』に含まれる定型詩の形式的特徴を明らかにするとともに，恋愛詩でありながら多分に教訓的な内容を含むというその特異性に鑑み，デシャンの *Balades de moralitez* との比較を試みる。さらには結婚の秘蹟を重んじ，夫婦愛を称揚するという連作の根底を流れるガワーの思想の中に，フィリップ・ド・メジエールが自らの著書で披歴したキリスト教的な結婚観や，ニコル・オレームの仏語訳を介してフランスで流布したアリストテレス由来の家政論との類似性を探る。

**10:00〜12:20**　**研究発表Ⅵ**（リバティタワー 8階1087教室）

**10:00〜10:40**　**司会**　市川　誠（東京理科大学）

## 13. Ælfric の説教と聖人伝における *soplice* と *witodlice* の用法について

**佐藤桐子**（大東文化大学）

古英語の *soplice* と *witodlice* は，'truly, indeed' などを意味し，Ælfric も使うが，*Catholic Homilies*（２巻，以下 CH）と *Lives of Saints*（*LS*）では頻度が異なる。これら２語は３巻中に546例あり，そのうち439例（80%）が *CH* に起きている。さらに，位置について，*CH* では文頭，*LS* では文中に多い。こ

うした違いから，テキストのジャンルによって用法が異なるのではないかと考えられ，その観点で Ælfric の説教と聖人伝から 3 作品を選んで調査した。その結果，説教ではほとんどがラテン語の particle の逐語訳として文の接続に使われている。一方，聖人伝では Ælfric が独自に書き加えたものが多く，主に動詞などの意味を強調する。つまり，Ælfric の *soplice* と *witodlice* の使い方はテキストのジャンルによって異なると言える。さらに文脈を精査すると，説教では，これらの語が，神学的な説明の中で前述の内容を補強する役割を果たしている。それに対して，聖人伝は，時間の流れに沿った記述が中心であるため，文接続には *þa* などが適切で，*soplice* や *witodlice* は主に動詞修飾や頭韻のために用いられている。

**10:50〜11:30　司会**　小塚良孝（愛知教育大学）

## 14.『アングロ・サクソン年代記』A，B，C 写本の Common Stock における関係代名詞の用法

**阿部春来**（早稲田大学学部生）

古英語における関係代名詞の主要なタイプには，指示代名詞や現代英語の that に相当する小辞をそれぞれ単独で利用した① se 関係詞や② þe 関係詞，および，これらを組み合わせた③ seþe 関係詞がある。各タイプの用法に関して研究者間である程度の一致は見られるものの，その詳細については意見が分かれている。本発表では，古英語初期における関係詞節の使用状況を，恐らく 9 世紀末にウィンチェスターにおいて最初に編纂された『アングロ・サクソン年代記』（the *Anglo-Saxon Chronicle*）が同地でほぼ同時代に書き写されたとされるパーカー写本（Parker Manuscript; A 写本）の Common Stock（紀元前60年から紀元後890年代初期の項目）において分析する。特に，関係詞節内における語順の揺れや，関係詞と先行詞の位置関係といった構造的特徴に注目し，それらがどのような要因によって生じているかを明らかにしたい。併せて，A 写本と似た系統にある B，C 写本における用例についても検討する。

**11:40–12:20　司会**　TANI, Akinobu（Kwansei Gakuin University）

## 15. Legal Multinomials in Late Middle English

Johanna VOGELSANGER（University of Zurich）

Legal documents are often characterised by their “formulaicness and comparatively restricted vocabulary” (Stenroos and Thengs 2020: 5), such as

bi- and multinomials (commonly called legal doublets and triplets) like *covenant* and *agree* or *grant*, *bargain* and *sell*. Stenroos & Thengs (2020: 8) describe this formulaicness as a "direct consequence of their functions." One major function is to put on record a specific kind of agreement between two or more parties, whether that be a sale, gift, exchange, bequest, or something else, and this paper aims at examining these kinds of expressions in Late Middle English.

The corpus used for this study is *A Corpus of Middle English Local Documents* (*MELD*), and the starting point of my investigation are the most common verbs used for this purpose, *agree*, *covenant*, and *accord*. I collected all instances of these three verbs in MELD, as well as all instances of the verbs most frequently co-occurring with *agree*, *covenant*, and *accord*. Using this data gathered from MELD, along with the available corpus metadata, I investigate diachronic and spatial distribution, variation, and change in the frequency and order of these verbs in bi- and multinomial expressions in the later Middle English period.